The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



# 前六識の俱生
## ――『五蘊論』安慧釈をもとに――

佐　藤　智　岳

## 1．問題の所在

スティラマティは，TrBhの中で，前六識の同時生起を認めない考えを退け，同時生起するという考えを示す[1]．一方，ヴァスバンドゥの『五蘊論』(PSk) に対する注釈書であるPSkVでは，前六識の同時生起を認めていない可能性がある．本稿の目的は，PSkVが「前六識の同時生起を認めていたか」という問題について，『五蘊論』に対する他の注釈書の記述も含めて考察し，PSkVが前六識の同時生起を認めていなかった可能性を示すことにある．

## 2．PSkVにおける前六識俱生否定の可能性

問題となる記述は，心 (citta) の語義解釈に関するものである．ヴァスバンドゥは『五蘊論』で，心について，さまざまである (citra) と蓄積されたもの (cita) であるという二つの形の語義解釈を提示する[2]．それを受けてPSkVは，「さまざま」であるという心の語義解釈に対して，次のように述べる．

> PSkV [89, 7–90, 6]：その識は，心とも言われ意とも呼ばれる．同義語の意味を説明するために〔次のように〕語る．「さまざまであること，また意が拠り所であることから」と．さまざまであることから「心」であると呼ばれる．…そのうち，転識は，所縁を個別に了別することを本性とし，また所縁を個別に認識することは，複数の形象をもつから，眼などの識はさまざまとなる．…このように，さまざまであることから心と言われるが，それは種類に関してであって，<u>刹那</u>に〔関して〕ではない．一方，<u>刹那</u>は所縁それぞれに決まった形象をもつから，さまざまではない．それ（六識）は第一義的な心ではない[3]．

上記下線部は，校訂本ではlakṣaṇaとなっている．ただしPSkV (Tib)[4]，およびPSkBh[5]（同注釈書にはPSkVと同じ言葉の使用が見られる）ではkṣaṇa (skad cig / skad cig ma) となっている．そこで筆者は，2つのチベット語訳テキストに従い，校訂本を訂正し，kṣaṇaと読む．

さてPSkVは前六識が「さまざま」である理由を「形象の複数」という視点で



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



述べる．さらに補足を述べるかの様に，「さまざま」であるのは，あくまで〈種類〉に関してであって，〈刹那〉に関して「さまざま」と言っているのではないとする．この〈種類〉とは，PSkBh からも支持できるように「形象の〈種類〉」のことであろう．つまり当該箇所は，前六識が「さまざま」であることが，「形象が複数（さまざま）か単数か」という問題と関連して論じられていると言える．以上の考察をもとに，PSkV の記述を整理すると次のようになる．(1) 六識は複数の形象をもつから「さまざま」である．(2) 形象の種類が「さまざま」である．(3) ある瞬間に関して「さまざま」と言っているのではない．

当該箇所は，前六識の同時生起を認める立場で著されたのであろうか．むしろ，ある瞬間に六識の幾つかが生起していれば，その瞬間の形象は「さまざま」となってしまい，(3) と矛盾する．ここで PSkV が六識に関して，ある瞬間には一つの識の生起しか認めていないという可能性を示すことができた．

## 3．他の注釈書の記述

先の PSkV に対応する PSkVi の記述でも[6]，前六識が「さまざま」であることが，「形象の複数」と関連して述べられている．ただし「形象が単数か」という問題や〈刹那〉という視点は取り上げられていない．一方の PSkBh は，PSkV と同じ言葉を使用しつつ，次のように詳細に論じている．

PSkBh［D 94a5–b4, P 178b4–179a4］:「さまざまであり，意が依り所となることから」だと述べられている．心の意味はさまざま（*citra）という意味である．なぜなら，さまざまの本質を示しているものであるから．…そのうち，諸転識（*pravṛttivijñāna）を指して，なぜ「さまざま」と言うのかと尋ねるならば〔，次のように述べる〕．つまり，諸転識というのは，色（*rūpa）などそれぞれの所縁（*ālambana）を本質とし，色などといった対象（*viṣaya）もまた黄色や白などさまざま〔なもの〕を本質とするものである．そしてそ〔のようなさまざまな対象を〕所縁とする眼識も，まず青を所縁とするならば，青の形象として生じる（*utpanna）．それから，黄色を所縁とするならば，黄色の形象として生じる．それから，赤を…．さまざまな対象と同様に，識もさまざまとして生じているので，六識を指して「心」とも言う．
以上のように，六識はさまざまな所縁を所縁とするものであるから，さまざまであるので「心」と説明する〔のである．それについても，〕また識によって，刹那において順番に（*krameṇa）把握される数多くの青や黄色などの種類（*jāti）に関して（*adhikṛtya），「さまざま」と言うのであって，一つの刹那を指して「さまざま」とは言わない．なぜか，と尋ねるならば〔，次のように述べる〕．一つの刹那においては対象を確定（*niścaya）し，形象を確定するので，さまざまな形象があるのではない〔と答える〕．どのように対象を確定し，形象を確定するのか，と尋ねるならば〔，次のように述べる〕．刹那の



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



時に，「さまざま」とは言わない．〔すなわち〕青のみを所縁とするのであって，黄色を所縁とするのではなく，青を所縁とする時，他ならぬ青の形象として生じたのであって，黄色の形象として生じていないから「さまざま」〔な形象が〕あるのではない[7]．

上の記述から，PSkBh は，〈種類〉を「形象の〈種類〉」とし，lakṣaṇa ではなく kṣaṇa（skad cig ma）として理解していることが確認できる．また，当該 PSkBh の記述を整理すると次のようになる．(a) 識は，刹那において，順番に，認識対象として取り入れるから，形象の〈種類〉は「さまざま」である．(b) 一つの刹那において，形象は「さまざま」ではない．(c) 刹那の時，A のみを所縁とするので，形象は A である．それ以外の形象は生じないから，「さまざま」ではない．

これらの点から，次のことが言えるだろう．まず，1) 対象が複数存在していても，各瞬間に識によって捉えられる対象（＝認識対象）は一つであり，2) 一刹那において，形象は「さまざま」ではない．したがって，ある瞬間に形象が複数存在することはない．

このことを，前六識の同時生起の否定を踏まえた文脈として理解するか，もしくは単に，ある一つの識による認識の仕組みに関する文脈と理解するか，という選択肢がある．ただし「形象が複数（さまざま）」であるから六識は「さまざま」であると述べながら，その後特に言及することもなく，各々の識に関する議論へと展開することは不自然だと考え，前者が適当であると判断した．またこの判断は，「所縁縁に依存して，異なる種類（prakāra）〔の転識〕が起こること」[8] に対する PSkBh の注釈で「白の形象」や「黄色の形象」だけでなく，眼識と耳識が順番に生じる様子が示されていること[9] からも支持できるだろう．

## 4．PSkBh の記述の PSkV への適用

PSkBh は PSkV と同じ言葉を使用しながら注釈している．確かに，PSkBh には PSkV には見られない言葉もあり，また PSkBh は PSkV の記述に完全に即した注釈書とも言えない．ただし今回考察した箇所に関しては，互いに矛盾する記述はない．つまり少なくともこの箇所に関しては，PSkV と PSkBh の考えは同じであると言える．したがって，当該 PSkBh の理解を PSkV に適用することに問題はないと判断できる．

## 5．結論

本稿では，まず PSkV が前六識の同時生起を認めていない可能性を示した．次



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



に他の２つの『五蘊論』に対する注釈書を含めて考察を進めた．PSkBh では，PSkV で取り上げられた問題が詳細に論じられている．PSkBh は「一刹那に一つの対象しか認識しない」と理解している．筆者は，このことを前六識の同時生起を認めないことを踏まえた文脈として理解することが適切であると考えた．また PSkBh の理解は，PSkV にも適用できると判断し，PSkBh の記述によって，今回提示した仮説を補強することができることを示した．

---

1）TrBh［102, 1–17］，TrBh［104, 11–16］.
2）ヴァスバンドゥの「心（citta）」の語義解釈については，兵藤［1982］を参照.
3）PSkV［89, 7–90, 6］.
4）PSkV（Tib）［D 231b5–6, P 45b1–2］.
5）PSkBh の作者については，Schmithausen［1987: 575–576］，同［2014: 146; n. 610］を参照.
6）PSkVi［D 24b7–25a2, P 93b6–8］.
7）PSkBh［D 94a5–b4, P 178b4–179a4］.
8）PSk［17, 2–3］: ālambanapratyayāpekṣāṃ prakārāntaravṛttitāṃ］em. 松田［2010: 199; n. 19］参照.
9）PSkBh［D 103b4–7, P 189b5–8］.

〈略号および参考文献〉

PSk: *Pañcaskandhaka*. Li Xuezhu and Ernst Steinkellner (eds.). *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*. Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2008. PSkBh: *Pañcaskandhabhāṣya*. D no. 4068; P no. 5569. PSkV: *Pañcaskandhakavibhāṣā*. Jowita Kramer (ed.). *Sthiramati's Pañcaskandhakavibhāṣā*. Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2013. PSkV (Tib): *Pañcaskandhakavibhāṣā*. D no. 4066; P no. 5567. PSkVi: *Pañcaskandhavivaraṇa*. D no. 4067; P no. 5568. TrBh: *Triṃśikāvijñaptibhāṣya*. Hartmut Buescher (ed.). *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and Its Tibetan Translation*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenchaften, 2007. 兵藤一夫［1982］「「心（citta）」の語義解釈――特にヴァスバンドゥの立場を中心にして――」『仏教学セミナー』36: 21–39. 松田和信［2010］「五蘊論スティラマティ疏に見られるアーラヤ識の存在論証」『インド論理学研究』1: 195–211. Schmithausen, Lambert［1987］. *Ālayavijñāna*. Part II. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies. 同［2014］. *The Genesis of Yogācāra-Vijñānavāda: Responses and Reflections*. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies.

〈キーワード〉 *Pañcaskandhakavibhāṣā*，スティラマティ，六識俱生，刹那，ākāra

（九州大学大学院）



NII-Electronic Library Service